

〔特集：地域と民族の生活文化〕

陝西省関中地域における農村の伝統習俗の復活と変容¹⁾

——関中地域を対象にした伝統民俗変遷に関する
1997年から2004年に至るフィールドワークから——

Revival and Changes of Folk Customs in Guanzhong

趙 宇 共

ZHAO Yugong

中国西安市社会科学院民俗文化研究所教授

Institute of Folk Culture Studies, Xi'an Academy of Social Sciences

E-mail: gxxian@public.xa.sa.cn

Abstract

Basing on the data gathered in recent years fieldworks, the author analyzes the gap, revival and changes happened to the traditional lifestyle of peasants in Guanzhong District, Shanxi Province. During the period of the Great Cultural Revolution, folk traditions in rural areas were repressed and almost destroyed, and therefore a huge gap appeared between traditional and modern lives. Entering the Reform-Open period, folk customs revived in the rural areas, and a lot of changes happened by getting the influences from the Market Economy. This paper concentrates its discussions on the reasons of the folk culture's revival and the related new changes.

I. 本稿の背景

1997年の冬から2004年3月にかけて、筆者は西安市周辺にある長安、周至、戸県、藍田、涇陽、高陵、三原、洛川、礼泉、乾県、武功、大荔、合陽、華県の諸処においてフィールドワークを実施し、観察・記録を重ねた。その間、各家を訪ね、さまざまなグ

1) 本稿は2002年6月10日(月)に愛知大学国際コミュニケーション学会主催で開催された第21回国際学術交流プログラム・第4回フィールドワーク研究会における講演記録にもとづいている。主催者の河野真教授、司会を務められた周星教授、通訳の夏目晶子さんに感謝を申し上げる。

ループにインタビューを行ない、種々の資料を実地に調査した。それによって判明したところでは、西安を中心とする関中地域は、周、秦、漢、唐など歴史を通じて諸王朝の京畿所在地であり、また古くは仰韶文化時代の人口密集区でもあったことも重なって、民俗伝承は長い歴史を有し、時には紀元前の痕跡すら残している。もとより、歴代王朝を通して異民族・異国の風俗特色を取り入れてもきたが、全体としては官辺の儒教文化を映していると言うことができる。

20世紀の50年代まで、伝統民俗は関中地域の農村ではかなり安定した伝承を示していた。1950年代から60年代中期、すなわち文化大革命時代までは、多少の変化はありはしたものの、概して伝統的な状態が継続していた。しかし文化大革命の十余年の間に伝統的な民俗事象は人為的な干渉によって中断された。その後、80年代の後半になって行政の干渉が緩むと共に、かつての民俗がある種の勢いをもって回復した。のみならずそれらは、拡大や、盛大化の傾向すら見せている。

伝統的な民俗がかくも迅速かつ全面的に復活したのは思いもよらないことであった。その原因は何であろうか。社会、経済、政治、マスコミおよび大衆文化など多方面からの影響がそこにはみとめられる。またそれらは、物質的な様態から精神的な様態にまで及ぶ変化でもあった。正に激変や異変と言ってもよいほどであった。それらが人々に受け入れられたのは何故であったか、また復活した民俗事象の今後の行方はどうであろうか。この小論は、かかる問いに答えることを目指している。

II. 伝統的な民俗の復活

20世紀の60、70年代、関中地域においても、農村の伝統習俗が厳しく禁止された。両親の死去に遭っても喪服を着ることはできず、婚礼の際にも国家の領袖に敬拝することしか許されなかった。寺院は取り壊され、一族の系図を記した族譜も焼き払われた。伝統的な冠婚葬祭、祝日の祭り、娯楽活動なども一時はほとんど消滅した。かかる状態が十年ほど続いた。しかし20世紀の80年代から今日に至って、関中地域の農村では、伝統習俗が急速かつ、広範囲に復活した。その特徴は幾つか挙げることができるが、第一は、民俗が抑圧を受ける前の50、60年代の形態への復帰であった。先ず、その側面について、主な項目を挙げる。

1. 祖先への祭祀

多数の農民の家では先祖三代の位牌、すなわち、農民の間で「影」と俗称されてきたものを祭ってきた。「影」とは手描きの絵姿あるいは商品化された絵像で、先祖の様子を象り、名号を記したものである。戸口に土地の神を祭り、扉に門を守る神の画像を貼り、台

所に竈の神様を祭る。鎮宅のための割符や魔除けの鏡などを持つ家もある。正月になると、家族あるいは一族で祖先を祭り、線香を立て、供え物を供え、祭祀など一連の活動をする。そのほか冠婚葬祭、また子供が生後満一月になるときに、先祖を祭る。

2. 結婚

結婚する際には占い師に縁起の良い日を選んでもらう。タブーとしては生まれ年の合わない人が結婚の現場に立ち入ってはならないことになっている。婚礼においては門扉に赤あるいは黒い布を貼り、陽が昇る前に嫁を迎える。また、嫁入り道具を箱に入れるときに飾いにかける風習もある。それは、娘は嫁に行ってしまうが、実家に財宝を残すことを意味する。娘が家を出るときには箸を投げ、靴を換える。それは嫁いだ後はもはや実家の飯を食べず、実家の財宝を持ち去らないことを表している。嫁入りの筋籠や箱馬車に乗るとき、縁起の良い方向に向かい、降りるときは魔除けのために火を廻って三周歩く。嫁ぎ先につくと「走袋」といって、地面に敷いてある赤い絨毯の上を歩むことが習慣となっている。それは代々血統を継ぐことへの願いを表している。庭に入ると「五福」と称される数種の穀物や貨幣を撒き、それによって結婚後の生活が豊かになり、食物や金銭食ふこと困らないことを願う。次いで両親に礼拝し、縁起の良い方向に向かってベッドに座る。将来聡明になり、性能力のあるために葱やさいかちを使って顔を洗う。十二時ごろ竈の神様を祭るとき茶碗を裏返して運を占う。宴会に来る客は杯を回して酒を飲む。

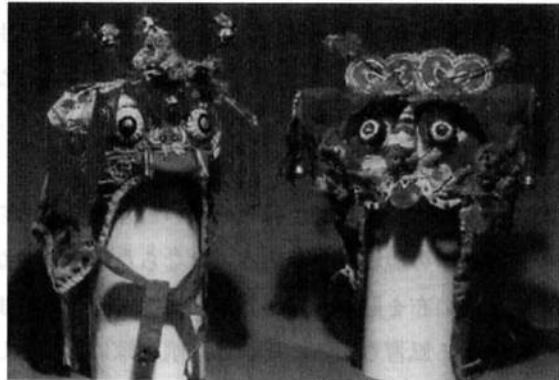
3. 葬儀

葬儀に際しては墓地は必ず始めに占い師に相を占ってもらう。霊柩は霊堂に安置して弔う。「三献」、つまり初回、次回、終回と三回供える儀式を行う)弔いの行列を組んで村を回るときには、母の兄弟の伯父の家が真っ先に迎える。子孫、親戚は亡者との血縁遠近によって異なる喪服を着、顔を覆う布をかける。出棺のとき、村人は自宅の戸口に火を入れ、それによって魔を避ける。孝子(=死者の子)は綱を引いて、車を走らせることを示す。墓地には紙で作った童子童女や金山銀山などを一緒に葬る。村中の人々が墓に土を添える。その後三年目に墓碑を立てる。また死者の出た家は春節に赤い色の対聯を貼ることはできず、三年の服喪を終えてはじめて貼ることができるようになる。

4. 生育

出産前後には、身体に障るような食品をできるだけ避ける。出産に際しては、戸口に鋤の刃や赤い布をかけて魔を避ける。新生児が生後一月になると、親戚は魔除けや、乳の出をよくして子供が元気に育つことができるようになど、種々の願いを込めて、様々な形やデザインの蒸しパンを贈って産婦を見舞う。子供の生まれた年、月、日、時刻に相当する

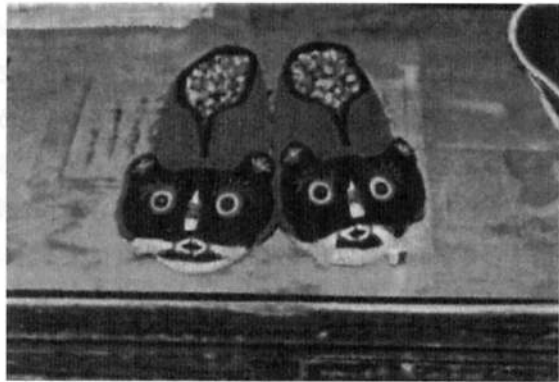
干支 8 字を陰陽五行に当てはめて吉凶禍福を判断し、また子供が無事に育つことができるために必ず誰かに義理の父になってもらう。子供のいない人は廟会に赴いて子授け乞う。子供には長命鎖、虎頭帽、虎頭靴などのお守りをつける(写真1-2)。師走の時期に、藁をもやして子供の病気を払い除ける。症状の分からない病気にかかったときは、「魂を呼び戻す」ための呪法を行なう。



(写真1) 虎頭帽

5. 住居の建築

家屋を建てる時、土を掘るのに適した吉日を選ぶ。棟上げには爆竹を鳴らして祝い、八掛を記して吉祥符をかける。隣家と屋根の高さを比べ、見劣りがしないように建てる。屋根を東に高く、西に低くする。それは、東の青竜は一丈(3.33メートル)高くなっても



(写真2) 虎頭靴

かまわないが、西の白虎の頭が上がるのはあまり望ましくないと信じられているからである。災難がある場合占い師を招いて厄払いをしてもらう。

6. 正月と祝日の行事

大晦日の夜、寝ずに年越しをする。子の時刻に餃子を食べる。先祖を祭り、墓参りをする。村の各家を回って新年の挨拶を交わす。夜を徹して灯りをつけておく。対聯をはじめ、縁起の良い言葉を書いた紙や、門神の画像を貼る(写真3)。親戚を訪ね、年始回りをし、子供にお年玉をあたえる。母の兄弟の伯父が甥に灯籠を贈る。正月には縁起の良い話題で話をし、家中の明かりをつけて厄払いをする。子正月の15日の元宵節に福の神、都市の守護神、子供を授けてくれる女神に礼拝する。竹の馬を走らせ、民間で伝承されてきた舞踏をおこなう(例えば、若い女性に扮した一人が、竹と布で作った底なしの船の船縁を腰に結び付けて上半身を船の上に出し、船頭に扮したもう一人が櫂を手にして船の側につき、

二人で歌いながら練り歩く。) 銅鑼と太鼓を敲き、竜灯舞を演じる(竜の形をした布製または紙製の灯籠を大勢で棒に上げて踊りまわる。) 銅鑼と太鼓を敲き、竜舞を踊りつつ廟巡りに行く。旧暦の二月二日は俗称「竜台頭」と言う。つまり東の方向に当たる七つの星宿の形は竜の頭が上がるような形になるのである。季節はちょうど春に入り、各種の疫病が流行りやすい。北方では豆を炒って食べる習慣があるが、それは「豆」は天然痘の「痘」と発音が同じなので、厄病を払い除けるために、豆を食べるのである。清明節には墓参りをし、親族の死から三年未満の人は白い喪服を着る。5月5日の端午節には毒害虫に侵されないように、魔払いのために雄黄、菖蒲、よもぎなどを粉にして、布や五彩の絹糸で包んで袋にして子供に付け、粽も食べ、雄黄を塗る。8月15日の中秋節には一家団欒のうちに過ごし、月餅を食べる。十月の「鬼節」には、紙で作った銭を焼いて亡霊を祭るなど種々の行事がある。

7. 綿布の手織り

農村では結婚には、必ず手織り木綿で作ったシートが要る。新婦が手作りの靴の敷き皮を婿に贈ることは、自分で嫁入り道具を作る伝統をきちんと守っていることを

示す。老人は自分の出棺と埋葬に使う喪布を織る。新婚の枕に必ず「魚が蓮の花に戯れる」図案や、「蛇が兎に絡まる」など生殖を表す吉祥の図案を織る(写真4)。婚礼の夜、親戚や友人が新婚夫婦の部屋に集まってからかったり、騒いだりするとき、手織り木綿のハンカチをプレゼントとして贈る。

8. 廟堂の建設

竜神、土地神、福神、都市の守護神、女神を祭る廟(社や祠など)を建てる場合、それに



(写真3) お正月の対聯



(写真4) 鴛鴦枕：刺繍の吉祥図案

要する資金は団体に出資してもらったり、個人が寄付をうけたり、また托鉢によって集める。廟は人々によって見守られる。

9. 廟会

廟会での伝統地方劇や現代流行歌舞は、それぞれ決まった観衆を持っている。古い社と新しい社は競って宣伝をし、それによって勢いを盛り上げ、参拝者を奪い合う。廟会での賭博屋台には、マージャン、カルタの一種である「天牌丸」(32枚からなる)、同じく賭け事の「圧宝」などがある(圧宝とは、銅製の四角の小箱に親となる人が白赤各半分の四角な木の中に詰め、蓋をして出す。外の人はその赤の向いている方向を当てるために賭け金をその周りに積んでおく。蓋を開けて赤にあたった人が勝ちとなり、その賭け金と同額の金をもらい、白にあたった人は負けとなり、賭け金は親に取られる。白赤半々の方向に賭けた人は勝負なし。そのほかにも色々な賭け方がある。)参拝者は布施を行ない、線香を立て、お経を読む。廟会では籤引きも行なわれる。また収入を得るために頻繁に廟会が行なわれる。廟会には特に中高年の女性の集まりが多い。彼女達は一緒に読経をし、劇を演ずる。たくさんの参拝者を吸い寄せるために演劇のほか、各種の遊戯と娯楽活動も行う。廟会のとき人々は乞食者に喜捨する。

10. 占い

農民たちは病気にかかって薬石の効かない場合、神に願をかけたり、占いに頼ったりする。家族も不吉な出来事があつたり、万事うまく運ばない場合は占い師に厄払いをしてもらう。冠婚葬祭、家屋の新築、引越し、開業など特別な日には各々の禁忌がある。結婚には、茶碗をひっくり返して運命を占う。家もしくは寺で線香を立てるとき線香の灰を見て吉凶を測る。廟会では人相、手相を見てももらったり、籤引きをしたり、占いをしたりする。

11. 冠婚葬祭の習俗における専門的職能者

冠婚葬祭が盛んになるにつれて、それを専門にする人々も増えている。例えば、結婚、葬儀に際して楽器を吹き鳴らす田舎周りの劇団、霊柩を安置する臨時の掛け小屋を作る人、氷の棺を貸し出す人、占い師、地相師、儀典師、紙花や花輪など死者を祭るときに使われるものを作製する人、刺繍する人、手織り木綿を織る人、巫女、冠婚葬祭廟会のときに「竹板」を打ち鳴らして調子をとりながら唱える人々で、その多くはそれを専門的に行なっている。

12. コミュニティの伝統

これまで数十年に渡って種々の原因で排斥されたり、禁止されたりしていたコミュニ

ティの伝統活動が再び行なわれるようになってきている。例えば渭北地区では、人々は祭りでは集団で娯楽演芸巡りをし、日照りに際しては竜神を祭って雨乞いをする。韓城県では神楼を担いで舞いする。さらに、山奥の里では花模様の付いた皿を「端公」(巫師)による廻す儀式・行事なども見受けられる。

III. 伝統民俗復活とそこでの変化

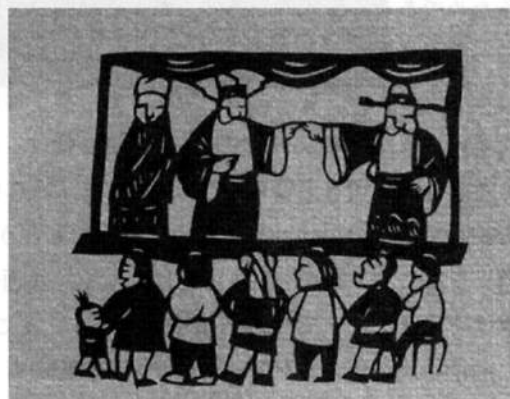
こうして伝統的な民俗が復活しているが、そこには時代の変遷、使用される器具の違い、さらに関係者の精神の変化によって、嘗て無かった種々の新しい特徴も出現している。

1. 習俗踏襲・接統における意識性と強調

婚礼において、昔のように馬車ではなく、自動車に乗るようになってきているが、縁起の良い方向に走らせなくてはいけないのは同様である。出棺に際して自動車やトラクターで棺を引くが、孝子は白い布綱で車を引いて、孝心を尽くすことを示す。葬式には電子オルガンで伴奏するが、古い秦劇を演じて霊を祭る。ただし霊堂では蠟燭ではなく、電灯をつけるようになった。仏寺に参詣する際、現存する行政区画にかかわらず、やはり「北社」、 「南社」のような昔の地名で活動を催す。

2. 伝統とファッションの並存

葬儀に際して伝統的な秦劇(写真5)、弦板劇、影絵芝居(民間芸術の一種で、薄い獣皮で作った人形を白幕の後ろで操り背後からの灯光によって幕上に投影してみせる)などを演じながら、流行歌を歌い、喜劇や短い出し物を出す。伴奏には、伝統的な楽器だけでなく、西洋の楽器も入っている。春節に家門の両側に張る対聯にしても、伝統的に縁起が良いとされてきた文言の他に、カトリック教の内容のもの見受けられる。酒宴では、アルコール分の高い白酒もあれば、コココーラのような流行の飲み物も用いられる。贈答においても、伝統的な進物品、例えば自家製の饅頭もあれば、現代の電気製品、絨毯、お金なども贈られる。霊堂の供え物として、竜、鳳凰、虎などの形に作った



(写真5) 切絵：秦劇

饅頭と並んで、現代の飲料や食品、例えば、パン、インスタントラーメンなども見られる。会葬においても、死者に仕える紙で作った少年少女の人形、金山、銀山の他、紙で作ったテレビ、冷蔵庫、洗濯機、ビルディング、車などもある。



(写真6) 五毒文様の腹掛け

3. 民俗事象の簡素化と商品化

市場経済の発展とともに、伝統民俗の内容もますます簡素化と商品化

に向かいつつある。たとえば、正月の灯笼や対聯なども、自分で作ったり、描いたりはずせず、町で買うようになっている。夏の刈り入れが終わると、母の実家の伯父（叔父）たちは甥に自家製の五毒文様の腹掛けを贈るのが慣わしであったが、現在では商店で購入したヴェストをプレゼントする（写真6）。冠婚葬祭での客の接待についても、面倒を嫌って町のレストランで宴席を設ける人もいれば、一定の費用を出して家政業に携わる人たちに任せて、招待者自身はまったく手を出さない場合もある。嫁入りに際しても、新婦は持参する服飾などに自分で刺繍をほどこすのではなく、町で買ってくるようになっている。

4. 儀礼を故意に顕示する傾向

現在、関中地域の農村では、息子たちは、結婚するとすぐ両親と分かれて住むのが一般的となっている。伝統的な孝道観念が大きく変化したのである。ところが、両親の葬式は盛大に行なわれる。これは社会的な交際の上で世論を考慮したり、自分の信望を高めたりするためである。伝統的な葬式、たとえば跪いて靈柩を守り、泣き、供え飯を頭の上に上げて三回供えるなどの習俗は伝統的な孝道に沿っているが、儀礼があまりに繁雑で、耐え切れない者も多い。もっとも、現在でも、孝子は親孝行の心情を表すために、意識的に大声を挙げ、また立ち上がりながら跪いて泣き続け、それを周囲に見せるように顕示する傾向がある。葬儀を司る主事も、芝居でもするように強引に孝子を引き起こす。あるいは、役者を招いて、自分の代わりに跪いて泣いてもらう人もいる。さらに、通夜では、茶菓子、煙草、さらに酒・料理を供するだけでなく、映画やビデオを上映したり、マージャンを提供するなどして、客や隣人の来訪を促す。そこには葬式を盛大に賑やかに行わなければ、面子や人気や名誉を失いかねないとの配慮も入っている。同じく、結婚、新生児の初満月祝い、老人の誕生日、家の新築・上棟に際しても、多少顕示的であったり、大げさに振舞うことが少なくない。たとえば、爆竹を鳴らしたり、贈られた祝いの品々を庭一杯に

吊るしたり、嫁入り道具をずらりと並べたり、コインをばら撒いたり、楽手に奏樂させたりするのは、ほとんど見せびらかす意味を帯びている。

5. 実用化の傾向

互いの競合もあって、拡大し盛大になりつつある伝統習俗の復活の動きであるが、そこには現実に合わせて実用性の傾向が強まっている。正月、結婚、子供の生後満一月の祝い、誕生日、新築、引越し、開店あるいは会社を興すなどの祝いごとなどは、いずれも、他人に頼んだり、頼まれたりする機会である。その名分のもとに、贈り物をしたり、酒宴を開いたりして、付きき合いをもち、関係を結ぶことができる。それゆえ、名誉を求め、互いに交流しあい、人的ネットワークを図り、多方面での利益をもとめようとする要求を満たすことにもなる。

6. 社会経済的背景による男女性差観の変化

関中農村は今までの習慣としては、初めて生まれた子が男の子である場合のみ満一月のお祝いをしなかったが、今日では女の子の場合でも行うようになった。また男性が中心の祭り、たとえば銅鑼や太鼓の敲き、獅子舞を抱くどのような娯楽演芸、また演劇などは、従来、女性は主に参加者であった。しかし合陽県では爆竹の皮を奪う行事が行われ、子供が生まれるようにキリスト教の聖母に礼拝し願掛を行なうが、6、7年までに神に願をかけて生まれた男の子以外は、翌年の行事のために資金を募集する役、すなわち「神頭」を担当することができなかった。しかし今日では、女子もできるようになり、またお金を出しさえすれば、「神頭」になる資格をもつようになっている。

IV. 伝統民俗復活の原因

地方政府も、輿論の主流も、伝統的な民俗の復活のすべてを支持しているわけではない。たとえば、冠婚葬祭においてときに大げさに見栄を張って酒宴を開き、廟を建て、人々の吉凶禍福判断をし、巫女に家相や墓所地相を占ってもらったり、葬式の日取りを選定してもらうことなどについては、政府もその禁絶を繰り返して言明している。多くの村々には「紅白理事会」、つまり冠婚葬祭理事会が設けられ、もともとの古い習俗を廃棄し、新しい方式で行事をするように唱えている。さらに家計が困難な家族のなかには、吉凶の挨拶や贈答や、付き合いをせず、自分が主催する行事の場合にも多額の金をかけて大げさに見栄を張るようなこともしたくないという気持ちがはたらく。それにも拘わらず、伝統民俗の復帰が現実となり、世論の大きなプレッシャーの下に、流れに従わざるを得ないことがある。その要因を次に挙げる。

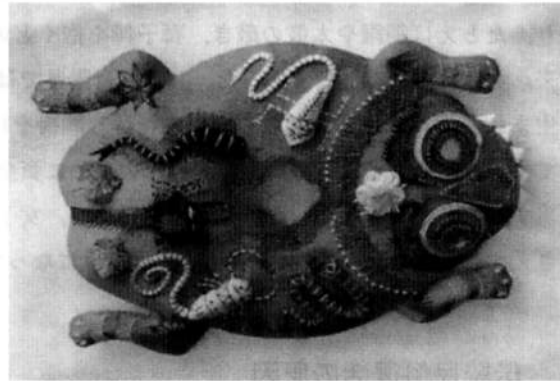
1. 政治環境の相対的緩和

20世紀の80年代後期から、農村における土地の請負制と市場化が進んだが、それに伴って、行政が民間行事へ強力的に干与することが次第に減少した。政治環境が相対的に緩やかになったと言ってよく、それが民俗の復活をめざす当事者に安心感を与え、民俗を社会に広めることが可能になったのである。

2. 経済政策との関わり

経済的側面の重視の結果、族復活が合法性をもつようになった。20世紀80年代の後半から、政府が全国各地で経済の活性化や、市場開発を強力に推し進め、「文化によって舞台が設えられ、経済が主役となって演劇をする」、つまり、文化を支えとしながら経済を発展されるというのは当時のスローガンであり、実際の行動でもあった。政府が民俗的な活動を主導したり、商家が広告を出したりするときには目的があるが、そうした「文化によって舞台が設えられる」目的は、要するに人気集めのためなのである。例えば銅鑼を鳴らし太鼓の敲き、娯楽演芸を催し、高足踊りや、地方劇を企画した紙切り、あるいは小麦粉で

いろいろな形の蒸しパンや菓子を作る民間芸人たちが登場して独特の技を披露する。それは封建的な迷信でなく、伝統文化や民間文化の性質をより強く示している。その後、各地では観光業や文化産業が発展し、伝統民俗の品物や行事は日一日にその資源の価値が現れるようになった(写真7)。これらが直接的あるいは間接的に伝統的民俗の復活を促したのである。



(写真7) 観光商品化された民芸品：五毒文様の枕

3. 利害関係

例えば、廟を建設するときには、寄付金を募ることができる。また廟会に際して、出店商人や出演団体から費用を集めることも可能である。正月に提灯を贈ったり、ヤンコ(秧歌)踊りを催すときも、それぞれ関係者から経費を徴収することができる。また寺観に参詣して神や仏に礼拝するときは、タバコや酒を持参する。そして、冠婚葬祭、子供の生後一月の満月の祝い、老人の誕生日のお祝い、正月などの祝日、上棟式、老人の棺に漆塗りをを行うとき、子女や親戚、友達、クラスメート、同僚、隣人などから御祝儀が贈られるが、その金額はかなりものである。現在、贈答における得失は絶対に平等ではなく、権

勢、地位、経済力のある人は他人から受取った物や金銭額が支出を大幅に上回る。それは贈り手が今後の利便を念頭に置いていることが密接に関係している。要するに、いつかこれら実力者たちの好意を受けることを期待して、進物や金銭を贈るのであり、またそれをきっかけにして彼らと付き合いや関係を始まることが考慮されていることもある。したがって、一種の投資と言ってもよい。コミュニティではこうした影響力の大きい人々は、通常、伝統民俗の復活を推進する側に立ち、自らもそれに加わる。そのため、そうした流れが一旦できると、周囲の人々はそれに合わせて行動する他ないことになる。かくして、地域的な民俗が形成されるわけである。

4. 習俗・行事の物質的な基礎

今農村の生活は前より豊かになり、関中地域多数の家では食料が十分であり、ゆとりもでてきた。そのため、農民は行事をする経済力を持つようになってきた。

5. 当事者の霊心と世間の期待の混合

冠婚葬祭、子供の満月のお祝い、老人の誕生日お祝い、上棟式などを通して、自己の経済力、人脈、名誉の持ち主であることを示す。コミュニティでの地位、信用を維持するために人々は互いに贈答を交わし、お付き合いするのである。その流れに従わない人は世論に責められ、損失を蒙ることも少なくない。

6. 幸運祈念

科学が進展する時代にあっても、人間の意思ではどうにもならないことがある。例えば、初めての子供は男の子であってほしいとか、気候が順調で、疫病や災難がなくなってほしいとか、速く金持ちになりたいとか、自家の果物や家畜などが豊作であってほしいといったことで、この種の願望は限りなくあるであろう。同じような生活環境なのに、ある人は幸運に恵まれるが、ある人は不幸に遭う。そこで人間には計り知れないあの世に自分をコントロールする超自然の力が存在しているのではないかとも思えて来る。それを信じない人ですら、ともあれ事が順調に運び、幸運が訪れるように神様の加護を祈るのである。

7. 娯楽の側面

土地の請負制が実施されて以来、農村の集団活動が少なくなり、娯楽活動も多くはない。そのため、そうした単調、重複、つまらない生活を調節するものとして行事が行われるときには盛り上がり、人々は喜んで参加する。

8. 都市コミュニティでの仏寺の役割

昨今、仏教寺院は次のような働きを持つようになっている。悩みを訴えたり、解消したりする公共場所としての役割である。もちろん、キリスト教の教会堂でも類似した現象がみとめられる。中高年の女性たちはお寺でおしゃべりをしたり、小唄を歌ったり、世間話をしたりする。いじめられた姑が集まって不満を訴え合うこともある。これに比べて一部の農村では、お年寄り（主に60歳以上の人々）の関心はやや異なり、特に過去に民俗行事に参加した多くの人（主に男性）が、目下、各地で伝統習俗の復帰を提唱・組織し推進している。

9. 伝統習俗のビジネス化

伝統的な習俗がサービスの意味をもち、それを提供する人が現れたので、農民たちにとって冠婚葬祭などで便利になった面がある。費用が安く、一般の家でも負担できるので、伝統的な方式で行事をする風習になったわけである。

V. 伝統習俗と比較して現れた特質

陝西省関中地域の農村で始まった20世紀80年代後期の伝統習俗の復活は1950年代以前のそれと比較して、次のような特質がみとめられる。

1. 信仰性の低下と経済実用性の高まり

1950年代までには、関中地域の農村の伝統習俗は基本的には精神面、特に信仰の性格を帯びつつ形づくられていた。それに比べて現今の習俗は、一部の人たちを除くと、大部分の人たちにとっては実用的な目的を持っている。例えば、結婚、子供の誕生満一月のお祝い、葬式、正月の娯楽活動・巡回、年始回り、廟会の催しなどは、明らかにプレゼントを交換し、人脈のネットワークを築き、金銭を受取るなど実用的な目的をもっている。

2. 儀式の抽象性の希薄化と随意性の拡大

今日、伝統的な習俗において儀式の神聖性が重視されることはもはやなくなり、理解もされなくなっている。儀式に用いられる用具も昔のように厳しく守られなくなっている（祭礼に用いる古い器はほとんどが壊され、伝統儀礼に詳しく、それにしたがって司る人も稀で、なかなか見つけることはできない。その結果、お寺に奉げる神帳の上に、賞杯、パンダ、車などの図案などがまじってくる。また神様に演じるとき用いられる竿の上に金髪碧眼の西洋人形がくくり付けられることもある。お寺の神棚の前に跪いて礼拝し、線香を立て、焚表するなどの儀礼をするときの作法も一定せず、随意勝手のことが多い。プロ

の巫女や男性の神子、また地相見などもほとんど途中からその道に入ったので、利益優先である。儀礼は師伝ではなく、映画やテレビ、あるいはまったくの他者から学んだものであることが多く、伝統の専門性は欠如している。

3. 表面化傾向と根源性の喪失

伝統民俗と言っても、今日の形態はわざと人に見せるために復帰したものであることが多い。もっとも、冠婚葬祭、子供の誕生後満一月のお祝い、誕生日のお祝いなどを行なう人は、それはそれで動機を持っている。それゆえ、人々は伝統の禁忌を厳しく守らず、農民たちの言い方を借りれば、〈その雰囲気らしくすれば結構〉なのである。言い換えれば、場面の盛り上がり、道具の色彩、人を引き付けるか否か、形が目立つか否かなどが最も大きな関心事となる。その結果、民俗的な活動は表面的な傾向を強める。当事者ですらその行事に含まれる意味を自分なりに解釈するのであるから、伝承の根源性はすでに中断されているとも言える。

4. 安定性の欠如と可変性

このように伝統習俗の復活においては信仰性が低下し、根源性が失われる面、随意化・表面化の傾向になりつつあるため、伝統習俗としては安定性が欠けるものとなっている。人々は他所で他の行事に接したり、大衆メディアの影響を受けたりすると、儀礼の様式や器具を変えてしまう。筆者は8年間にわたって継続的に観察するなかで、民俗的な行事が年々変化し、至るところで形を変えていることを多く見聞した。その多くは局部的な、どちらかと言えば細かい変化であるが、それらが積み重なって民俗や伝統行事の行方は不透明と言うしかない状況となっている。

5. 魅力の低下と地域的特色の希薄化

今日の民俗行事は他者に見せる性質が強く、伝統的な形態と比較すると、神秘性、神聖性、荘厳性、真実性などの魅力は弱まっている。観光地での商業的な公演であれば、なおさら娯楽の性質が優勢になり、従来の意味での民俗的な性格は減退する。大衆的な文化製品や情報が非常に多くの人々に享受される昨今、各地域の独自の特色は相互の模倣によって変形をきたしている。同時に、多くの地方の民俗行事が次第に近似したものとなり、一種の様式化を示してつつある。

参考文献

- 周星・王銘銘編 1996年『社会文化人類学講演集』天津人民出版社。
史宗編 1995年『20世紀西方宗教人類学文選』上海三聯書店。

丁世良・趙放編 1997年『中国地方志民俗資料編・西北卷』北京図書館出版社.

邦訳／徐璐（西北大学日本語学部助教授）
2002年6月10日（月）第21回国際学術交流プログラム・
第4回フィールドワーク研究会
於 愛知大学豊橋校舎5号館1階510教室